

2025 年度

学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

2025年度 梅光学院中学校・高等学校 学校評価書 校長(樋口 紀子)

1 学校教育目標

*学校目標

Beyond the Borders 「自分を越える・国境を越える」

*生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」:授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」:体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」:学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

2 現状分析

・学び:ICTを活用した授業実践や協働的な学びは各教科で着実に定着し、生徒が自ら調べ、考え、表現する授業場面は確実に増えてきている。また、授業時数の確保や総合的な探究の時間の管理、学籍・成績管理の体制整備も進み、教育課程を安定的に運用する基盤は整ってきた。一方で、基礎学力の定着、提出物管理、単元別テストと授業評価の活用、早期からの進路支援には、なお改善の余地がある。

・経験:Wake-Up全員留学、探究学習、高大連携、進路行事、生徒主体の学校行事などを通して、生徒が体験を進路や自己理解へ結びつける機会は着実に広がっている。加えて、全員担任制のもとで複数の教員が生徒理解と支援に関わり、配慮生徒情報の共有体制も整えられつつあり、多面的な支援の基盤は強まっている。一方で、行事運営や委員会活動における情報共有、中長期的な見通し、組織的な引き継ぎには課題が残っている。

・奉仕:礼拝、宗教行事、サービスマーケティング、地域・海外でのボランティア活動は継続して行われ、ミッションスクールとしての教育の土台を形づくっている。自由参加型の活動も含めて多様な機会が提供されており、ボランティア参加者数や海外ボランティア実習の継続からも、その歩みは着実である。学校評価アンケートからも、キリスト教教育、ボランティア活動、学校全体の雰囲気に対する肯定的な受け止めが見られる一方で、活動の意味の共有や参加の広がりには、なお工夫が必要である。

3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

・学び:本年度は、ICTを活用した授業改善を進めるとともに、授業時数の確保、指導と評価の一体化、学習習慣の定着を重視した。各教科で進んできた対話的・探究的な学びを土台に、生徒が自分の考えを表現し、他者と関わりながら学びを深める授業づくりをさらに進めることを目指した。また、生徒が学びと将来とを結びつけて考えられるよう、進路支援を高2・高3だけに偏らせず、より早い段階から系統的に行うことを課題として意識した。

・経験:本年度は、Wake-Up全員留学、探究学習、高大連携、進路行事、生徒主体の活動をばらばらに扱うのではなく、生徒の自己形成へつながる一つの教育の流れとして機能させることを重視した。特に、探究や大学連携での学びを志望理由書や進路選択へつなげること、また学校行事や委員会活動を通して主体性と協働性を育てることを大切にしたい。さらに、全員担任制や支援情報の共有体制を活かし、多様な生徒を多面的に支える学校づくりを進めたが、その取組を継続可能な仕組みに高めることが今後の課題である。

・奉仕:本年度は、礼拝や宗教行事を学校生活の中心に据え、サービスマーケティングやボランティア活動を通して、学んだことを他者のために用いる姿勢を育てることを重視した。単に活動機会を設けるだけでなく、福音に触れる経験と隣人愛の実践とを結びつけ、本校らしい学びの形として位置づけることを大切にしたい。また、活動を一回限りの体験で終わらせず、振り返りや分かち合いを通して内面化させることを課題として意識した。

4 学校評価総括(取組の成果と課題)

・学び:授業改善と教育課程運営の両面で一定の前進が見られた。ICT活用や協働的な学びは広がり、教務面でも授業時数の確保や学籍・成績管理が着実に進んだことで、学校全体として安定した学びの基盤が整えられた。一方で、生徒の学力差への対応、提出物管理、評価方法の再検証、早期進路支援の充実は引き続き取り組むべき課題である。

・経験:本校の特色である留学、探究、進路支援、生徒主体の活動は、それぞれに成果を上げている。特に、生徒が自分の経験を進路選択や将来像へ結びつけ始めている点、また全員担任制や支援情報の共有体制により教職員が連携して生徒を支えられるようになってきた点は評価できる。一方で、行事運営や委員会活動の継続性、実務の定着、引き継ぎの精度向上は今後の重要課題であり、広報や対外発信の成果をどのように入学者増へ結びつけるかも検討を要する。

・奉仕:礼拝、宗教行事、ボランティア活動は継続して実施され、本校教育の柱として機能した。多くの生徒が福音に触れ、他者のために行動する機会を持つことができおり、ミッションスクールとしての歩みは着実である。一方で、自由参加型の活動には参加の濃淡も見られるため、より多くの生徒が自ら関わり、その意味を実感できるようにすることが今後の課題である。

5 次年度への改善策

・学び:ICT活用をさらに授業改善へ結びつけるとともに、単元別テストや授業評価の分析・活用を進め、基礎学力と学習習慣の定着を図りたい。また、授業時数の確保や学籍・成績管理の安定運用を維持しつつ、中1から高3までを見通した進路支援の流れを整理し、教員間で共有できる体制を整えたい。加えて、生徒自身が学びを振り返り、将来へ接続していける指導の工夫も進めていきたい。

・経験:Wake-Up全員留学、探究学習、高大連携、進路行事、生徒主体の活動が相互につながるよう、年間を通した設計をより明確にしたい。また、全員担任制と支援情報の共有体制を形骸化させることなく運用し、行事運営や委員会活動、広報活動でも実務のマニュアル化と引き継ぎの仕組みを整えたい。さらに、留学や研修においては、教育的効果を高める工夫に加え、健康面や危機管理の体制整備も進めていきたい。

・奉仕:礼拝、サービスマーケティング、地域・海外でのボランティア活動をさらに充実させるとともに、振り返りや発表の場を通して学びを深めたい。また、サマリアデーや支援地とのつながりへの理解を深め、活動の意味を生徒全体で共有できるようにしたい。より多くの生徒が自ら参加し、経験を分かち合う学校文化を育てていくことが、次年度の大切な課題である。

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価							
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析
中学校	①	「全員担任制」による多面的な生徒理解と、他者を尊重するコミュニティの形成	「全員担任制」のメリットを活かし、一人の生徒を複数の教員の視点で見守ることで、いじめや不登校の予兆を早期に発見・対応する。 トラブルが起きた際は、当事者間の対話を重視した指導を行い、他者の痛みを知り、互いの違いを受け入れる（隣人愛の）姿勢を育む。 学級活動や学校行事において、生徒が企画・運営する機会を保障し、教員は指示ではなく支援に徹することで、生徒の自治能力を高める。	A: 生徒間のトラブルに対し、組織的な対応で早期解決が図られ、学級・学年全体が落ち着いた状態で学校生活を送れている。 B: 不登校傾向や悩みを持つ生徒に対し、チーム（担任団・SC等）で情報を共有し、継続的な関わりができています。 C: 生徒間の人間関係に課題が見られ、継続的な指導や支援を要する状況が生じている。	「全員担任制」の体制を活かし、複数の教員の視点から生徒の様子を見守りながら指導を行った。生徒間の人間関係においては、いじめと認定されるような重大事案はなかったものの、日常的なトラブルやグループ関係の変化などは見られた。そうした場面では、関係教員が情報共有を行いながら当事者間の対話を重視した指導を行い、生徒が互いの立場や気持ちを理解する機会を設けるよう努めた。また、学級活動や学校行事においては、生徒が主体的に企画・運営に関わる機会を設け、自治的な活動を支援した。ハロウィン企画やクラスマッチ、研修旅行の企画など、生徒自身が意見を出し合いながら活動を進める場面が多く見られた。	B	生徒間の人間関係に関するトラブルは見られたものの、教員間で情報共有を行いながら対応を進め、学級・学年として大きな混乱には至らず学校生活を維持することができた。また、不登校傾向の生徒については、担任団やスクールカウンセラー、管理職等が連携しながら支援を行い、継続的に関わる体制を整えることができた。生徒主体の行事や活動も一定程度行われており、生徒が自治的に学校生活に関わる機会を確保することができた。一方で、人間関係の問題が完全に解消されるわけではなく、引き続き継続的な見守りと支援が必要な状況も見られる。今後も全員担任制のメリットを活かし、複数の教員が関わる体制で生徒理解を深めながら、コミュニティ形成を支援していく必要がある。一方で、生徒間の小さなトラブルや個々の不安の表れを早期に把握し、学年内でより丁寧に共有・対応していく体制づくりは、今後の課題である。
	②	基礎学力・学習習慣（提出物管理）の定着と、探究・グローバル学習への接続	・課題の配信や提出にTeams/ロイロノート等を活用し、生徒がタスク管理を可視化できるように指導するとともに、期限を守る規律を徹底させる。 ・「Wake-Up全員（留学）」や探究学習と連動させ、今の勉強が将来の世界を広げることにつながるという動機づけ（キャリア教育）を行う。 ・基礎学力が十分に定着していない生徒に対して、提出物の確認や個別の声かけ、必要に応じた放課後の個別対応等を行い、探究・グローバル学習を通して進路や将来への関心を高める。	A: 生徒がTeamsやロイロノート等を活用して課題や連絡事項を自ら確認し、提出物管理や学習の見通しを持って行動できている。 B: 「Wake-Up」や探究学習への取り組みを通じ、生徒が学びと進路・将来とのつながりを意識し、自分の考えを発言・記述・発表の中で表せるようになっている。 C: 学習への取組に大きな差が見られ、提出物管理や日々の学習習慣の定着が進まず、継続的な個別支援を要する状況が目立っている。	ICTツール（Teamsやロイロノート）を活用し、課題の配信や提出管理を行うことで、生徒が自らタスクを確認できる環境を整えた。課題配信や提出管理の仕組み自体は安定して運用されており、生徒が課題や連絡事項を確認する習慣は一定程度定着してきている。また、「Wake-Up」や探究活動と関連づけながら、学びが将来の進路や世界の広がりにつながることを意識した指導を行った。今年度から中学1年生でも探究活動を実施し、学びの成果をポスターとして発表するなど、生徒が学習成果を可視化する機会を設けた。	B	Teamsやロイロノートを活用した課題配信や提出管理の仕組みは安定して運用されており、生徒がICTツールを通して学習課題を確認する環境は整っている。一方で、提出物の未提出率が前年度より改善したという実感は十分には得られておらず、提出物管理や学習習慣の定着には引き続き課題が残っている。また、探究活動やWake-Upと関連づけた学びを通して、生徒が将来や進路に関心を持ち始めている様子も見られる。基礎学力の定着が遅れている生徒については、学校として一律の補習体制は設けていないが、各教員が個別に提出物や学習状況を確認しながら支援を行っている。今後は提出物管理や学習習慣の定着をより組織的に支援する仕組みづくりが課題となる。
高等学校	①	基本的生活習慣（タイムマネジメント）の確立と、他者を受け入れる温かいクラス作り	・遅刻や欠席が見られる生徒には、個別の面談を通じて生活リズムや悩みに寄り添い、ご家庭と連携しながら改善に向けたサポートを行う。 ・スクールカウンセラー等と連携し、生徒一人ひとりの特性に応じた柔軟な関わりを行うことで、孤立感のないクラス運営を行う。 ・HR等を通じて、他者の事情や価値観を尊重する心を育み、互いに支え合う（隣人を愛する）関係性を構築する。	A: クラス全体で規律ある生活習慣が定着し、全ての生徒が安心して学校生活を継続できている。 B: 生活リズムが不安定な生徒に対し、家庭と協力して継続的なサポートを行い、登校や学習への意欲を維持できている。 C: 一部の生徒において生活習慣の乱れや孤立感が見られ、十分な改善支援が届かなかった。	生活習慣や学校生活に課題が見られる生徒に対しては、個別面談や保護者連絡を行いながら継続的な支援を実施した。担任団だけでなく、管理職も面談に関わり、必要に応じて保護者と連携しながら生活リズムの改善や学校生活への適応を支援した。また、スクールカウンセラーとも連携し、生徒の状況に応じた支援体制を整えた。学級・学年の雰囲気としては、高校1年生では入学当初に人間関係のトラブルが見られたものの、時間の経過とともに落ち着きが見られるようになった。高校2・3年生においても学校行事などで意見の対立が生じる場面はあるものの、大きな問題行動につながることはなく、全体として落ち着いた学校生活を送ることができている。	B	遅刻や欠席が多い生徒は各学年に一定数見られたが、担任団や管理職が面談を行い、保護者とも連携しながら継続的に支援を行うことができた。また、スクールカウンセラーとの連携も実際に行われており、生徒一人ひとりの状況に応じた対応を進める体制は整えられていた。高校1年生では入学当初に人間関係のトラブルが見られたものの、その後は学校生活に慣れ、学年として落ち着きが見られるようになった。高校2年生・3年生においても大きな問題行動はなく、全体として安定した学校生活が維持されている。一方で、生活習慣が不安定な生徒への継続的な支援は引き続き必要であり、今後とも家庭・スクールカウンセラー等と連携した支援を継続していく必要がある。
	②	ICTを活用した「自律的な情報管理能力」と「双方向コミュニケーション力」の育成	・連絡事項をTeams等で配信し、生徒が自ら情報にアクセスし、スケジュールを管理する習慣（自律性）を身につけさせる。 ・オンライン上のコミュニケーションにおいても、相手への配慮（リアクションや返信）が重要であることを指導し、丁寧な対話姿勢を育てる。 ・重要な連絡や提出物に対して、期限を守って責任ある行動がとれるよう、生徒の主体性を尊重しつつ必要な助言を行う。	A: 多くの生徒がTeams等を通じて必要な情報を自ら確認し、提出物や連絡に対して適切なタイミングで反応・報告・連絡ができています。 B: Teams等を活用した情報配信の仕組みの中で、多くの生徒は連絡事項や提出物の期限を意識して行動できているが、一部には継続的な声かけや確認を要する生徒が見られる。 C: 情報確認や提出物管理が十分に定着せず、連絡の見落としや期限遅れが繰り返し見られ、ICTを活用した自律的な行動に課題が残っている。	連絡事項や各種情報については、Teamsを中心に配信し、生徒が自ら情報を確認する習慣を身につけるよう指導を行った。また、オンライン上のコミュニケーションにおいても、リアクションや返信など相手への配慮を意識したやり取りの重要性を各担任団から継続的に指導した。提出物や各種期限については、多くの生徒が期限を守って行動することができており、一定程度の自己管理能力は育ってきていると感じている。一方で、ICT機器やアプリの通知をオフにしてしまう生徒も一定数おり、情報を見落とししてしまうケースも見られたため、必要に応じて個別の声かけを行いながら対応した。	B	Teamsを活用した情報配信の仕組みは定着しており、多くの生徒は連絡事項や提出物の期限を意識して行動することができている。また、担任団による継続的な指導を通して、オンライン上でのリアクションや返信などのコミュニケーション面でも改善が見られた生徒がいる。一方で、ICTツールに慣れることで通知をオフにしてしまうなど、情報を十分に確認できていない生徒も一部見られた。以前よりは改善しているものの、すべての生徒が自律的に情報管理を行えているとは言えず、今後も個別の声かけや指導を継続していく必要がある。

重村

雄太

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	①	論理的思考力の深化と「自分の言葉」による表現の確立	・段階的な記述指導の展開：グループでの意見構築から始め、最終的には個別の進路に応じた課題に取り組むなど、発達段階に合わせた記述演習を行う。 ・思考の構造化と可視化：ロジックツリーや構想メモ等のワークシートを活用し、文章の設計図を作成する工程を重視することで、論理の飛躍を防ぐ指導を徹底する。 ・ICT/デジタルツールの活用：添削フィードバックや共有ノートを活用し、自らの文章を客観的に見直して改善する習慣を身につけさせる。	A…文章の構成を正しく理解した上で、他者からの指摘をメタ認知し、自らの意志で論理を補強し、より説得力のある表現へ改善できている。 B…提示された型（ワークシートや構成案）に沿って、主張と根拠が矛盾しない文章を作成できている。また、指摘された明らかな誤りや論理の飛躍を修正できている。 C…語彙や文法、原稿用紙の使い方の誤りが目立つ。または、文章の筋道が通っておらず、指定された内容を書き上げることが困難である。	年度を通して段階的な記述指導を展開し、特に小論文作成において執筆前に「構想メモ」を作成する工程を徹底した。これにより、生徒が自身の思考を構造化し、論理の飛躍を防ぎながら文章の設計図を描く習慣が定着しつつある。進路に応じた個別課題においても、単なるテンプレートの模倣に留まらず、自らの考えを再構築して説得力のある文章へ昇華させようとする姿勢が見られた。一方で、語彙の選定や論理の緻密さにおいて「より説得力のある表現（A基準）」へ改善し切るには個人差が見られたため、全体としては概ね目標に沿った取組ができたと評価する。	B	提示された型に沿った記述は定着してきたが、今後は他者からの指摘をより深くメタ認知し、自律的に論理を補強できる力を養う必要がある。次年度は、ICTを活用した添削フィードバックの頻度を高め、自身の表現を客観視して改善するサイクルをさらに強化したい。また、高度な記述に対応できる語彙力の育成も並行して進めていく。	川口駿純
	②	自律的な探究姿勢と批判的読解力の向上	・単一のテキストだけでなく、同一テーマの異なる視点の新聞社説や新書を比較読解し、著者の意図を批判的に検討する活動を取り入れる。 ・ビブリオバトルや読書ポートフォリオを活用し、単なる要約に留まらず、自身の生活や社会課題と結びつけた「独自の問い」を立てる探究型読書を実践する。	A…文章の論理構成の妥当性を検証した上で、複数の資料を関連付け、自分の見解を根拠を持って述べることができる。 B…筆者の主張を正しく捉え、それに対する賛成・反対の理由を本文の根拠に基づき説明できる。 C…テキストの要旨把握が不十分であり、客観的事実と主観的な感想を区別して読むことが困難である。	同一テーマの異なる視点を扱う比較読解を実施した。これにより、筆者の主張を的確に捉える基礎的な読解力の向上を図ることができた。グループワーク等の活動を通じ、周囲と意見を交わしながらテキストを読み解く姿勢も概ね育まれている。しかし、複数の資料を関連付けて「独自の問い」を立てる探究的な学びや、客観的な根拠を伴って自らの賛否を論理的に構築する力にはまだ脆さが残っている。達成基準に照らすと、基礎的な読解・論述（B基準）は満たしているものの、自律的な探究への広がりという点では課題が残った。	B	筆者の主張を捉える段階から一歩踏み込み、社会課題と結びつけた批判的読解を深める必要がある。今後は、探究型読書のワークをより計画的に取り入れ、教員の支援がなくても自ら問いを立てて検証できる主体性を育みたい。また、他教科との連携も視野に入れ、生徒が生涯にわたって論理的・批判的に情報を活用できる資質・能力の育成を目指す。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	①	基礎学力を育み、学習意欲を高める	○単元別テスト等を通じて生徒の理解度を把握しながら、学習意欲を高めるように授業を工夫する。 ○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。 ○多彩な資料を準備しICTをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○生徒が主体となって活動する機会を多く設け、理解度を高められるように努めた。 ○単元別テスト前に、復習・テスト対策のため適宜宿題を課した。しかし、基礎学力の定着という点で課題が残る。 ○全科目において、ICTを活用し、生徒の能動的な授業参加を促した。	B	定期的に教科会を実施し、各教科・科目の授業の状況や取り組みを共有した。しかし、建学の精神に基づく教科の目標を達成するための評価、という点では更なる改善が必要である。 ICTなどを活用し、教科科目への興味関心を持ってもらえるよう努めたが、基礎学力の定着については課題が見られる。 →提出状況はまちまち。	広木光
	②	過去や現代の社会問題に関して理解・関心を深め、自分の考えをアウトプットする	○各単元に関連する社会問題を提示する。 ○生徒の社会問題についての疑問や関心事項を、単元内の学習内容に結びつける。 ○生徒がアウトプットをする機会を増やす。 ○発表前後の意見交換を通じて、より相手に伝わりやすい表現を模索できるよう支援する。	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	○各単元に関連する社会問題を提示するよう努めた。探究科目では、生徒の社会問題についての疑問や関心事項を学習内容に結びつけることができた。 ○生徒のアウトプットの機会を多く持つことができた。 ○発表をする際には、生徒同士が意見交換を通じて、よりよい表現を模索できるよう促した。	B	現代社会における問題と生徒が学習している内容はどのように関連しているかについて留意した授業づくりをおこなった。全学年において、社会問題に触れるようにしているが、生徒自身が考え疑問を持つという取り組みに着目すると学年間ばらつきが見られた。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数 学	①	分かりやすい授業の展開	・生徒の理解度に合わせて習熟度クラスを展開。 基礎から応用へと段階的に指導する。 ・抽象的な数学の概念を身近な例や具体的な事象に結び付け、ICTを活用し、図やモデルを使って直観的な理解を促す。 ・「教え込む」のではなく、生徒が自ら理解に到達できるような適切な問いかけや対話を軸とした授業を展開する。	A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している	習熟度別指導やICTの活用、対話を重視した授業展開により、授業理解の向上が一定程度認められた。概ね目標は達成したものの、生徒間に理解差への対応には改善の余地があり、総合的にB評価とする。	B	習熟度別指導やICTを活用した視覚的提示、対話を重視した問いかけを通して、授業の理解度向上を図った。一定の成果は見られたものの、生徒間の理解差への対応には課題が残り、さらなる授業改善が必要である。	崎 山 章
	②	基礎力・応用力の育成	・基本的な公式や解法を定着させるため、小テストや再テストを取り入れ、定期的な復習を促進する。 ・基礎知識を活用した応用問題や、実生活と関連した問題を扱い、問題解決能力・思考力を養う。 ・単なる知識習得ではなく、数学的事象の背景や理論を探究し、「なぜそうなのか」を追求する授業を行う。	A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している	基礎力定着を目的とした小テストの実施や、応用問題を通した思考力育成に一定の成果が見られた。一方で学習到達度に差が残り、十分とは言えない面もあることから、総合的にB評価とする。	B	小テストや再テストによる基礎力の定着と、応用問題を通した思考力の育成を図った。基礎面では一定の効果が見られた一方、応用的内容への理解には個人差があり、指導方法の工夫が今後の課題である。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	①	自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	○基礎学力の向上と、主体的な学びができるようになるために、予習と復習を習慣付けられる課題を配布する。 ○生徒自らが疑問を持ち、実験により、解き明かしていく過程を学び、実験手法やその結果をもとに、自然の事物や現象を質的・量的な関係や時間的・空間的な関係から説明できるように授業を工夫する。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	授業内の小テストや振り返り活動を通して基礎的な知識の定着を図るとともに、実験や観察を通して自然現象を説明する力の育成を図った。大半の生徒は基礎知識の定着や論理的に説明しようとする姿勢が見られたが、一部生徒は学習習慣や主体的な学習態度の形成に課題が見られ、目標に見合う成果にとどまった。	B	小テストの実施により基礎的な知識の定着は一定程度見られたが、年度後半になるにつれて取り組みへの意欲が低下する様子も見られた。特に中学1年生では学習習慣の定着や主体的な学習態度の形成が十分とは言えず、基礎学力の定着に課題が残った。一方、他学年では継続的な学習によって理解を深める姿が見られた。今後は学習習慣の形成を意識した指導や、取り組み方に変化を加える工夫が必要である。	山崎 廉知
	②	自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	○授業における観察・実験の割合を増やし、現象を実際に確かめながら理解するように指導する。 ○生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。 ○観察や実験から得られた結果を比較したり、関連付けたりできるよう、授業をデザインする。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	観察・実験や探究活動を通して、生徒が身近な現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する学習活動を行った。発表活動ではデータを整理し、表やグラフを用いて説明することを指導した結果、多くの生徒が根拠を基に考察し説明しようとする姿勢を身につけることができ、目標以上の成果が見られた。	A	探究活動では、生徒が実験結果をもとに考察し、発表を通して表現を改善していく姿が見られた。発表を重ねることで、表やグラフを用いた説明が増え、データを基に考察する力の向上が見られた。今後は、グラフの種類や使用目的を理解し、目的に応じて適切な表現方法を選択できるよう指導を深めていく必要がある。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価							
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析
保健 体育	①	積極的に運動に親しむ資質や能力の育成	○個人の授業記録により、自身の成長や能力を客観視させ、達成感や満足感に繋げる。 ○グループワークを通して、主体的・対話的な深い学びを身に付ける。 ○iPad等のICT機器を活用した協働的な学習を促す。	A 80％以上の生徒が目標を達成できている。 B 60％以上の生徒が目標を達成できている。 C 50％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	年度当初および年度末に教員体制の変更があったが、授業記録を活用して生徒自身が学習の成果や成長を振り返る機会を設けるとともに、グループワークやICT機器を活用した協働的な学習も概ね実施することができた。指導体制が安定しない時期があったため、取組の継続性や深まりには課題が残ったものの、全体としては目標達成に向けた授業実践を行うことができた。	B	教員体制の変動により、授業の継続性や取組の積み上げに難しさがあった。今後は、担当者変更時にも授業内容や評価方法を円滑に引き継げるよう、年間指導計画や授業記録の共有をより徹底していく必要がある。また、ICT活用や協働的な学習の実践を継続し、生徒が自身の成長を実感できる授業づくりをさらに進めていきたい。
	②	生涯を通じて周囲の人々と継続的に運動ができる資質や能力を育てる。	○グループ活動の主体的・対話的な活動の中で集団で体を動かすことの楽しさを学ぶ。 ○ICT機器を活用したチームの動作確認や戦術分析を通して、周囲の人々と各種目の特性を楽しむ能力を身につける。 ○授業中の大会運営はもちろん、クラスマッチ、スポーツ大会、他学年との合同授業の企画・運営に関わる中で、実践するだけではない、スポーツの楽しさを学ぶ。	A 80％以上の生徒が目標を達成できている。 B 60％以上の生徒が目標を達成できている。 C 50％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	年度当初および年度末に教員体制の変更があったが、保健体育の授業は継続して実施した。グループ活動を通して集団で体を動かすことの楽しさを学ぶ機会を設けるとともに、ICT機器を活用した動作確認や学習の振り返りも概ね行うことができた。また、授業内での活動を通して、周囲の人々と関わりながら運動に取り組む姿勢の育成を図った。一方で、他学年との合同授業は実施できず、活動の広がりという点では課題が残ったが、全体としては目標に沿った取組を進めることができた。	B	教員体制の変動により、年間を通した発展的な取組には制約があった。特に、他学年との合同授業や、より広い形での交流的な学びは実施できなかったため、今後は安定した指導体制のもとで計画的に実施できるようにしたい。また、授業中のグループ活動やICT活用をさらに充実させ、生徒が生涯にわたって周囲とともに運動に親しむ資質や能力を育めるよう改善していく必要がある。

重
村

雄
太

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	①	音楽の知識・技能や思考力・表現力を向上させる。	○音楽科においては、定期演奏会や日々の授業の課題、受験などを通して、自分の限界に挑戦できる環境とサポート体制をつくる。 ○音楽理論や音楽史の知識を増やし、実技や鑑賞に役立てられるようにする。 ○普通科においては、歌唱やトーンチャイム等の器楽、作曲など幅広い演奏・創作活動を行う。 ○合唱祭を通して、皆と協力して音楽的な完成度を追求する学習活動を行う。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○定期演奏会では、高Ⅲはソロに加え難曲のアンサンブルに挑戦し、高Ⅱは自ら作曲した曲を指揮、高Ⅰもピアノアンサンブルと合唱で初舞台に臨んだ。それぞれが限られた時間の中で、より高いレベルを目指して練習を重ね、本番も良い評価を得ることができたと感じる。 ○演奏技能だけでなく、理論や歴史、聴衆に音楽をどのように紹介するかなどを学び、演奏の表現力を深めるとともに、聴衆目線に立ったコンサートを企画する力を養うことができた。 ○普通科では合唱祭を通して、音やリズムを正確に歌う力や、周りの音を聴いて合わせる技能が向上したように感じる。トーンチャイムでも、他者の音を聴いてタイミングよく音を鳴らすことができていた。ピアノでは、楽器経験がない生徒でも両手演奏を達成することができた。作曲でも、様々な音やリズムを使い分けながら自分の作りたい旋律を試行錯誤する姿が見られた。	A	○定期演奏会・卒業演奏会などは、昨年を踏襲しながら新しいプログラムにも挑戦し、生徒の音楽力を高めるとともに、聴衆もコンサートを鑑賞して音楽について学び、楽しめるようにしていく。 ○普通科のアンサンブルや創作は、自分たちの音楽を客観的に捉えながらより高い完成度を目指していけるように、音楽を聴く力や演奏技能を育成していきたい。また録音・作曲アプリやAIも活用しながら、より豊かなアイデアを得られるように指導していく。そして練習の成果を見せられる場やを増やしたり、年間を通して成長を実感できるように振り返り活動を充実させたりして、生徒の意欲向上に繋げたい。	寺西穂香
	②	様々な音楽作品、音楽文化に触れ、音楽を愛好する心情を育てる。	○普通科・音楽科両方において、クラシック、日本伝統音楽、ポピュラー音楽、諸民族の音楽など、多くのジャンルの音楽を授業で取り扱い、それぞれの魅力や価値について考え、共有する活動を行う。 ○教師主導の説明ではなく、生徒が興味のある音楽について調べ、発表し合う機会を増やす。 ○他者と協力して音楽を作り上げる楽しさを実感できるように、アンサンブル活動を多く取り入れる。	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている B…６０％以上の生徒が目標を達成できている C…５０％以上の生徒が目標を達成できている	○普通科では、歌舞伎や能、組踊など日本の伝統文化でありながら、あまり生徒には馴染みのない芸能を鑑賞した。生徒の目には逆に新鮮に映ったようで、それぞれの演技や音楽の特徴を注意深く観察し、よさや魅力を自分なりにレポートにまとめることができていた。 ○音楽科では、クラシックを中心としながらも、授業や演奏会では箏の演奏や諸民族の音楽、ポピュラー音楽の調査を行い、日本や世界の音楽に対する知見も深めることができた。 ○高Ⅱや中３では、諸民族の音楽ワークショップをグループで企画させ、聞いている人も楽しみつつ学べる発表会にすることができたと感じる。また、その民族音楽の特徴と、歴史や宗教、生活などとの関わりについても考察し、それぞれの民族音楽の共通点や固有点を探しつつ、音楽の価値を再考する活動ができた。	A	○日本伝統音楽や諸民族の音楽では、様々な音楽文化を比較鑑賞する活動を行った。それぞれの違いを見分けることはできるが、「なぜそのような音楽的特徴を持つに至ったか」など思考を深める場面では課題が見られる。思考を深める発問やグループ活動中の形成的評価を増やし、学習をサポートできるようにする。 ○グループ活動が苦手な生徒や、逆にグループで仕事を負いすぎる生徒もいるので、それぞれの責任をもってバランスよく役割を持ち、自分の意見を発信しつつ協力して課題に取り組めるよう、活動の仕組みを作ってサポートしていきたい。 ○授業内の発表のみならず、掲示物などを制作させ他クラスや他学年の生徒の目にも触れるようにすることで、様々な音楽文化に対する興味関心を継続的に育てられるようにする。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	①	○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。また、欠席の多い生徒については、担任団と連絡を取り合って取り組ませようとした。	B	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。不登校気味の生徒の作品製作については、工夫が必要であると感じた。	山崎
	②	○美術を通して自己表現の楽しさを実感し、主体的に表現活動に取り組む態度を育てる。（中学校）	○各学年でテーマを設定し、自分の考えや感情を表現する制作活動を取り入れるとともに、鑑賞活動や作品発表の機会を設ける。	自己評価や鑑賞活動等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てる。 A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	各学年で設定したテーマに基づく制作活動を通して、生徒は自分の考えや感情を作品に表現しようと主体的に取り組むことができた。鑑賞活動や自己評価を通して、表現への理解を深める姿も見られ、目標に沿った成果が概ね達成された。	A	多くの生徒が自己表現を意識した作品制作に取り組み、他者の作品から表現の工夫を学ぼうとする姿勢が見られた。一方で、自分の考えを形にすることに苦手意識を持つ生徒も見られたため、作品の発表や共有の機会を増やし、自己表現への自信を育てる指導の充実が今後の課題である。	廉知

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	①	4 技能5領域のスキル向上	○教科書外の活動として、授業内外で以下のことを行う。 ・ 多読 ・ 語彙(Quizlet) ・ Key sentences(中学) ・ プレゼンテーション（MacKenzie English Presentation Contest） ○単元別テストに4技能（＋対話・会話）の要素を全て入れる	A… 8 0 %以上の生徒が目標を達成できている B… 6 0 %以上の生徒が目標を達成できている C… 5 0 %以上の生徒が目標を達成できている	本校の英語科は、授業を全て英語で行うことを謳っており、その達成度において、学習の遅れが心配される生徒が増加傾向にあることにより難しくなっている。 年度の前半では教員に休職者など不安定なことが一部あり、クラスを進度別に分割して教えることができず、進度が早い者や、遅い者への対応が難しかった。 後半教員が徐々に確保され、分割してクラスを設置することが可能となり、このような学習進度、深度に差がある環境に対応することができるようになった。 日本語能力が高いネイティブ教員2名が加わったことにより、英語で教授する本校の原則が以前にも増して可能となり、その点でも後半部は重点目標達成に近づけた。	B	本校では英検に力を入れており、高いレベル（準1級）の合格者も輩出している。一方で、学習に困難を感じる生徒層も以前より増えているため、授業や英検指導場も困難さが増している。 この進度差、理解度の違い、また記憶や再現能力の違いが著しいことへの対応が今後も重要で大きな課題となっている。 4技能習得への本校の重点目標は、以前から変わらない一貫した目標であるが、日本語能力に長けたネイティブ話者英語教員が2名加わったことにより、今後の進展が期待できる。	只 木 徹
	②	ICTを活用することによる英語学習への意欲向上・日常的に英語に触れる機会の確保	○Quizletを活用し語彙学習を行う ○Weblio英会話を通じて日本語が母語でない英語話者と英語で会話する楽しさを知る ○上記のものに加え、その他のICTソフト、プログラムなども用いて、より効率的・効果的な英語学習ができるよう努める	A… 8 0 %以上の生徒が目標を達成できている B… 6 0 %以上の生徒が目標を達成できている C… 5 0 %以上の生徒が目標を達成できている	ほとんどの授業において、単元別テストや単語テスト以外の活動では、ICT使用が定着している。 パワーポイント使用による授業の効率化、Quizlet, Socrative,ロイロノートをはじめ、目標にあがっているような様々なソフト・アプリを使うことができた。WeblioによるAI教材はトライアル期間中、生徒達はアプリを使って効果的に学習に取り組むことができた。	A	昨年から使用しているロイロノート、Socrative, Quizlet, nearpodなど授業内での理解度確認や課題提出などほとんどの生徒が使いこなせている。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
技術・家庭	①	生活と技術の見方・考え方を働かせた実践的・体験的な学習の実践	技術家庭科の各領域で技術や生活に関する知識・技能を習得する授業づくり	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている。 B…６０％以上の生徒が目標を達成できている。 C…５０％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	「エネルギー変換の技術」では、半導体や発電についてのレポート作成を通して理解を深めることができた。 「材料と加工の技術」では、調味料ホルダー製作を通して材料の特徴をどのように生かすかを体験的に学ぶことができた。 調理実習や裁縫実習では座学で学んだ知識を生かして実践に即した形で学びにつなげることができた。	A	・一週間に一度の授業であるので知識・技能の定着には体験活動とのリンクした取り組みが生かされている。 ・領域によって興味・関心の違いがあり導入段階、授業ごとの工夫がより必要と感じる。	下岡 達朗
	②	主体的に生活を工夫・創造する力を育てる	技術家庭科の各領域で、主体的に課題を見つけ解決する力（思考力・判断力・表現力）を体験的学習や実習・作業を通して身につける授業づくり	A…８０％以上の生徒が目標を達成できている。 B…６０％以上の生徒が目標を達成できている。 C…５０％以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	「情報の技術」では、マイクロビットを活用してプログラミングに取り組むことで課題を解決するためのスキルを身につけることができた。 「生物育成の技術」では、野菜の栽培を実践しiPadに栽培記録をまとめて課題解決力を養うことにつなげる活動ができた。 家庭科の単元では実生活の経験とリンクし、動画や資料を活用して今後の生活に活きる発見や問題解決につながる力を身につけることができた。	B	・生徒の興味・関心が高まるような課題の設定が意欲につながるので、授業での課題の設定、スキル、解決力をグループ活動を取り入れながら取り組むことができた。 ・休みがちな生徒へや興味・関心の低い生徒への支援の工夫が次年度の課題である。 ・生徒がいかに「自分ごと」と意識して学習させることができるかを、興味・関心・流行を探るながら関連づけて授業に作りをすることが課題である。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
情報	①	「情報モラル」に関する理解を深める	○生徒自身が、中学生に向けての「情報モラル教室」の教材、教案を作成し、LHRの時間に授業を実施する	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	○オリジナルのビデオを作ったり、クイズ形式をとったり、様々な工夫がなされた「授業」となった。 ただ、リハーサルの時間を十分に確保できなかったため、原稿を読み上げるスタイルになってしまったチームもあった。 授業を受けた中学生は、先輩の語りかけを興味を持って聞いていた。	A	○「教える」事によって、情報モラルをより深く学習することができた。 来年度も継続して実施できるように、計画的に授業プランをたてていく必要がある。また、今回理解を深めた部分が、自分の生活に落ちていくように、授業外でも、情報モラルに対する意識を高める声掛けを行っていく	大塚恵美子
	②	プログラミングを通して、「日常生活は、物事が互いに影響を与え合って成立している」ことを学び、「見通しを立てる力」を養う	○「ものづくり0.」の探究教材を使用した「分別ごみ箱」を作成し、自分のプログラムで実際に「物」が動く楽しさを体験する ○デジタル教材を使用し、実際にプログラミングを行い、自分の思い通りの結果を導き出すための「伝え方のルール」「効率的な順序」を学ぶ。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。	○「分別ごみ箱」では、命令が思ったように伝わらず、試行錯誤しながらも、楽しんで学習ができた ○プログラミングでは、「好き」な生徒と「苦手感」を持つ生徒に2極化した。	B	○座学だけでなく、「実際に動く」「実際に動かす」体験を多く取り入れていく ○興味のある生徒には更に高度な学習を、苦手な生徒には基礎的な知識、技能を定着させるべく、個別に対応できるように授業プランをたてていく必要がある	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	①	福音を聞くこと、知ること、信じること。神と自分と他者と、神の造られた被造物(自然や動物)を愛し仕える生き方(キリスト教精神、普遍的価値である人権や平等や博愛)を身に着けること。	普遍的な価値を持ち、人類に最も影響を与えている「聖書」を土台に、歴史の様々なジャンルの人たちがどのようにそれを生きたか、また現代の諸問題において、どのように知恵を得るのか、個人発表、またグループディスカッションを通して、中高生時代だけではなく、人生の役に立つことを学ぶ。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	1学期に歴史における国内外の「クリスチャン人物」55人から各自選んで調べ、互いに発表した。 2学期は大学総合型入試で用いられる「グループディスカッション」を取り入れ、35項目にわたる様々な生徒が直面するトピックを「聖書の価値観を学校生活・社会生活と結びつけて考え、正義・誠実・謙遜、信仰・希望・愛をどう生きるか。」を集団討議して発表し、作品にした。中学生においても高校生と共にディスカッションし、「グループとして結論」を出すことは役立つだろう。	A	(水)の1時間目のため、生徒の健康状態や睡眠不足が影響を及ぼすことが見受けられる。 6学年一緒にしていることは、授業内容からだけでなく、先輩を観ること、交流することが出来るのは、大きな学びである。	後藤 献一
	②	聖書、キリスト教文化を理解し経験すること。	学内外のキリスト教行事、地元の教会の礼拝に出席し、信仰生活を中高生のうちに体験する。そのフィールドレポートを提出する。継続して参加するよう勧める。 礼拝において主体的に参加し、奉仕をする。地域のボランティア活動を経験し、隣人愛を实践する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	リアルな教会を経験してもらうため、各自、地元の教会に、月1回程度行くことを奨め、レポートを提出している。また学内の教会であるBCC(Baiko Community Chapel)や、夏春のリトリートやバイブルキャンプ(韓国 & 北海道)に多くの中高生が参加した。様々なボランティア活動に延べ約200人程が参加し、自らの経験になり、地域貢献にもなった。教室から飛び出して、実践を経験してフィードバックをし、全体で恵みを分かち合うことが出来た。	A	「信・望・愛」と年間目標であったが、行いの伴う信仰、見えるようにする希望、動詞として行う愛、生徒が主体的に参加すればするほど経験することが出来ている。その機会を提供し続けること、より充実すること、さらに動員することを目指すしていきたい。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ド ラ マ	①	自分の資質を発見し、それをより豊かに広げる	○ドラマエデュケーションの基本的なエクササイズを通じて自分の資質と向き合う。 ○毎回の「ふりかえりシート」で自分の中の感情の動きを言語化する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○概ねどの学年も、積極的な参加が見られるが、中学校1年生に関しては、そもそも「自分と違う誰か」の気持ちを想像することに慣れていない生徒が多く、エクササイズで発見したことを日常生活に上手く落とし込めていない部分も見られる ○どの学年も、短い時間で、たくさんの「自分の言葉」を使ってふりかえりができる様になった。	A	昨年度に引き続き、「授業内で生まれた様々な魅力的な表現」を他の先生に共有し、他教科でも生かしてもらえるような手段を工夫することが今後の目標である	大 塚 恵 美 子
	②	自分と違う「他者」を意識し、コミュニケーション、プレゼンテーション力を向上させる	○「コミュニケーション」「リーダーシップとフォロワーシップ」をキーワードにして、クラスの特徴に沿ったプログラムを組む。 ○「短い作品創作とクラス内発表」を繰り返すことで、自分と違う「他者」と協力して一つの物事を成す経験を積む。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○「話し合う」事で安心せず、「実際に動いてリハーサルをする」事で、自分たちのイメージが一致しているかを確かめる習慣ができつつある。 ○中学生は、クラスメイトの作品を共感を持って観覧する「善き観客」の姿勢を身に着けつつある。高校生は、音響や照明を上手にを使って、相手と呼吸を合わせる楽しさと難しさをたくさん経験することができた。	A	ドラマの時間内でした「発見」を、日常生活に落とし込めるような工夫や声掛けを継続していく必要がある	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
教務部	①	授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○授業回数の確保	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○年間行事予定作成時に教科・分掌・生徒会との連携を密にすることで、計画通りの行事運営を目指した。 ○総合的な探究の時間について、余裕を持った授業時数の確保と管理を目指し、本校のスクールモットー、建学の精神の根本を学ぶ機会とした。	A	○行事担当者と教務部とで行事内容の共有を行い、行事と授業両方の実施環境を整えた。 ○校務支援システムを調整し、総合的な探究の時間の時数管理を効果的に行うことができた。	広木光
	②	授業の質を高め、教科における指導と評価の更なる一体化を目指す	○シラバスにおいて建学の精神に沿った教科の目標を設定し、その目標に準じて生徒自身が考動する授業づくりを目指す。 ○単元別テストの在り方、評価方法を見直す。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○アクティブラーニング形式の授業は増加してきたが、各単元で取り扱う課題については、研修等を通じて更なる検討が必要である。 ○定期試験とは異なる単元別テストの目的を改めて問い直し、評価方法を議論し続ける姿勢が継続して必要である。	B	○本校の教育方針の理解と、全教員が校外研修に参加するなどの学ぶ機会を、積極的に整えていきたい。また、今年度から新しくした授業評価アンケートの分析や活用にも力を入れていきたい。 ○試験範囲や評価の基準、再テストの在り方など、単元別テスト開始から6年が経った今、再検証する機会が求められている。	
	③	学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○校務システムBLENDにて、日々の出欠席を週担任と教務部でダブルチェックする仕組みを確立する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	○転入試験に適切に対応して処理できた。退学や転出事務も適切に迅速に行った。 ○出席簿や成績管理についても、部内でチェック体制を整え、実行することができた。	A	○週1回分掌会を設け、学籍・成績管理に係る業務を円滑に進めることができた。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
生徒支援部	①	主体性と社会貢献を育む生徒会・委員会活動の自律化	・「失敗から学ぶ」プロジェクト運営支援：生徒が自ら計画（見通し）を立て、教員は過度な介入を避けつつ、振り返りの時間を設けることで「情報の共有手段（対面・文字・ICT）」の選択を学ばせる。 ・他者のための企画立案：生徒会・委員会において、校内や地域社会の課題解決に繋がる「他者のための活動」を生徒自身が発案・遂行できるよう、助言とサポートを行う。 ・ICTの自律運用：連絡業務の効率化のため、生徒自身がこれらのツールを情報の整理・共有に使いこなせるようマニュアル作成や研修を生徒主体で実施させる。	A：生徒会・委員会の活動計画が80%以上の項目で生徒主体（教員は承認・助言のみ）で遂行され、適切な情報共有ツールが選択できている。 B：60%以上の活動で生徒が主体的に動いているが、情報の共有や見通しの構築において、適宜教員の強い主導が必要な場面がある。 C：活動の多くが教員の指示待ちとなっており、まわっている。	一部の委員会やプロジェクトで顕著な自律性と創造性が見られたが、部活動や行事運営における組織的な持続性において課題を残し、概ね目標達成となった	B	「生徒主体による学校創造」を掲げる中、特に図書委員会において、生徒自身の発案による校内イベントが定着した点は大きな成果である。一方で、学校行事の運営において、企画段階での情報共有や中長期的な見通しの構築に課題が残り、特定生徒への業務集中を解消しきれなかった。次年度は「実務の定着」と「組織的な引き継ぎ」の精度向上を重点課題とする。	川口駿純
	②	多様なニーズに寄り添う、強くしなやかな支援体制の構築	・支援体制の多層化：スクールカウンセラー（SC）、養護教諭、担任団との連携会議を定期化し、個別の支援計画を「自立」を促す視点で更新・強化する。 ・非常勤講師を含めた情報共有の徹底：前年度の課題であった「非常勤講師への伝達不足」を解消するため、BLENDやTeams上の共有ルールを厳格化し、全教職員が同じ歩調で支援できる体制を作る。	A：非常勤講師を含む全教職員への情報共有が迅速かつ100%行われ、SC等と連携した具体的な支援介入が適時に実施されている。 B：専任教職員間での情報共有と支援はスムーズだが、非常勤講師や一部の外部機関との連携にタイムラグや漏れが生じることがある。 C：情報共有の不足により、生徒への対応に教員間で差異が生じている。	情報共有のインフラ整備が完了し、非常勤講師を含む全教職員が迅速に連携できる体制を確立したことで、当初の目標を高い水準で達成した。	A	「誰一人取り残さない支援」を目指し、年度当初より進めてきた「配慮生徒情報のデジタル一元化」を完遂した。これにより、担任、学年、養護教諭、カウンセラー、そして情報の死角になりがちであった非常勤講師に至るまで、共通の認識を持って迅速かつ多角的な支援を行えるインフラが整った点を確認した。今後はこのシステムを形骸化させず、運用の質を高めることが課題となる。	
	③	学校外生活を見据えた「自律」的な生活態度の育成	・「内省」を促す生徒指導：問題行動が生じた際、単なる罰則ではなく、自分の行動が「他者（コミュニティ）」にどのような影響を与えたかを考え、自ら解決策を提示させる指導を徹底する。 ・家庭・地域との連携強化：家庭や地域社会においても自律した生活を送れるよう、保護者会や地域活動への参加を通じて、生徒の学校外での「自立した姿」を可視化し、評価する仕組みを作る。	A：問題への組織的な対応が完遂され、かつ生徒が自身の行動を省察し、自律的に生活を改善する事例が前年度より増加している。 B：問題へのチーム対応は機能しているが、生徒自身の自律的な変化を促すまでの指導・支援にばらつきがある。 C評価：特定の教員に負担が偏り、組織的な指導や未然防止の啓発が十分に行われていない。	事案に対する組織的な対応力を強化し、事案当事者の自発的な内省を引き出す段階に至ったが、集団全体の変容には継続的な課題を残した。	B	困難な生徒事案に対し、組織的な聞き取り・指導体制を確立した。また、外部（地域・警察）からの不審者・マナー情報への迅速な全体周知により、公共の場での規範意識を再確認させる機会を設けた。 課題としては、指導後の生徒の内省や行動変容に個人差があることである。次年度は「省察（リフレクション）」の質を高めるための、より専門的なアプローチの導入を検討する。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
進路指導部	①	生徒の意志（Will）を最優先した進路実現の支援と、多様な入試形態への対応	・高川生全員との二者・三者面談を実施し、単なる偏差値による指導ではなく、生徒の「やりたいこと（志）」に基づいた出願校選定を支援する。 ・総合型・学校推薦型選抜における志望理由書や小論文指導、面接指導の体制を整え、生徒が自身の言葉で語れるようサポートする（GP「他者に説得的に提示する」の要素）。 ・一般選抜希望者に対し、データに基づいた適切な学習指導と精神的なフォローを行う。	A: 第一志望（または生徒が納得した進学先）への現役合格率80%以上を達成する。 B: 調査書や推薦書の作成遅延等のミスをゼロにし、出願業務を円滑に遂行する。 C: 進路決定後の生徒満足度アンケートにおいて、肯定的な回答を70%以上得る。	高校3年生に対して年間複数回の面談を実施し、生徒一人ひとりの意思を尊重した進路指導を行った。面談は担任会とも連携しながら進め、生徒の進路希望や状況の共有を図った。また、進路指導では無理に国公立大学を勧めるのではなく、生徒がやりたいことや将来像を尊重した進路選択を大切にした。志望理由書の添削は生徒が希望する教員に依頼できる形で実施し、複数の教員が関わりながら指導を行った。入試対応については総合型選抜および学校推薦型選抜を中心に進路支援を行った。	B	年間を通して複数回の面談や志望理由書指導を行い、生徒の意思を尊重した進路支援を概ね実施することができた。また、生徒が希望する教員に志望理由書の添削を依頼できる仕組みにより、多くの教員が進路指導に関わる形で指導を行うことができた。探究活動で取り組んだ内容を志望理由書に活かすことができた生徒もあり、学びと進路を結びつける事例も見られた。今後は面談や進路検討会をより計画的に実施し、早期段階から進路支援を行う体制の充実を図る必要がある。	
	②	教員間の情報共有強化と、生徒の主体性を促す進路指導体制の構築	・進路検討会を定期的に実施し、模試成績だけでなく、普段の様子や探究活動の取り組み状況を含めた多面的な生徒情報を担任団と共有する。 ・「Compass」「K-Navi」等の進路支援システムやデータを活用し、生徒自身が成績推移を把握・分析できるような指導を行う（生徒の自律を促す）。 ・進路ガイダンスにおいて、一方的な説明だけでなく、卒業生の話を聞くなど生徒が自ら考える機会を設ける。	A: 進路検討会を年間計画通りに実施し、要注意生徒への対応策を全会で共有・決定できている。 B: 進路希望調査を期日通りに回収・集計し、面談資料として有効活用できている。 C: 外部模試の実施運営をトラブルなく行い、返却時に生徒へのフィードバックを行えている。	進路情報の共有は、担任会を中心に行之い、生徒の進路状況や指導方針について教員間で情報共有を図った。また、Teamsを活用して合否結果などの情報を随時共有するとともに、生徒の進路に関する情報はBLENDに記録することで、教員が必要に応じて確認できる体制を維持した。これにより、教員間で連携を取りながら進路指導を進めることができた。	B	担任会、Teams、BLEND等を通して生徒の進路状況や合否結果の共有を行い、教員間で連携しながら進路指導を進めることができた。一方で、全体での進路検討会は時間の確保が難しく、十分に実施することができなかった点は課題である。今後は進路検討会の実施方法を工夫し、より早い段階から教員全体で情報共有を行いながら進路指導を進める体制を整えていく必要がある。	重村雄太
	③	探究活動と連動したキャリア教育の推進と学習環境の整備	・大学のオープンキャンパスへの参加を促し、探究活動の延長線上に「大学での学び」があることを意識させる。 ・自習室や進路資料室の環境を整備し、生徒が落ち着いて学習や情報収集に取り組める場を提供する。 ・「探究」の授業担当者と連携し、探究のテーマと進路志望とのマッチングを考える機会（ワークショップ等）を設ける。	A: 年間の進路行事（ガイダンス、講演会等）を計画通り実施し、生徒の出席率90%以上を維持する。 B: 自習室の利用ルールを周知・徹底し、学習環境を良好に保つ。 C: Teamsや掲示板等を通じ、最新の入試情報やキャリア教育に関する情報を定期的に発信する。	探究活動や大学連携の学びを進路選択につなげるキャリア教育を意識した指導を行った。特に、大学連携の中で取り組んできた論文の内容を志望理由書の作成に活用するなど、これまでの学びを進路選択と結びつける指導を行うことができた。また、オープンキャンパスへの参加を積極的に促した結果、多くの生徒が大学の学びを直接体験する機会を持つことができた。	B	生徒に対してオープンキャンパスへの参加を促した結果、多くの生徒が大学の学びを実際に体験する機会を持つことができた。特に高校1年生の参加率が高く、進路ガイダンスを担当している外部機関（マイナビ）からも、他校と比較して参加率が高いという評価を受けている。また、大学連携で取り組んできた論文を志望理由書に活用するなど、探究活動と進路選択を結びつける事例も見られた。今後は探究活動の成果をさらに進路指導と連携させ、生徒が自分の学びと将来をより具体的に結びつけられるキャリア教育の充実を図る必要がある。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ミ ッ シ ヨ ン 部	①	ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○ミッション委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	毎朝の礼拝に内外から多様なメッセンジャーが来てお話をして下さい。遠方の場合、海外も含めて、動画メッセージを送って下さり、学校にいながらにして、豊かなメッセージを受けることが出来た。ミッション委員会の司会、音楽科生徒による賛美リードも充実していた。ライブ配信でいつでも見返すことが出来る。	A	保護者へのライブ配信を行っている。BCCや点灯式、クリスマス礼拝にも保護者の方々が参加して下さい。開かれたバイブルスタディを実施していきたいと願っている。	後 藤 献 一
	②	キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝、卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○イースター ○ツリー点灯式 ○収穫感謝礼拝、施設へのドネーション ○クリスマス礼拝 ○特別チャペル(春季・秋季修養会) ○BCC(月一の梅光コミュニティチャペル)	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	ミッションスクールという名前が形骸化することなく、魂を込めて、たくさんのミッションスクール行事を数多く行うことが出来、生徒もミッションスクールにいるということが感じられたと思われる。このリスト以外にも韓国ミッショントリップ、北海道バイブルキャンプを行った。	A	たくさんの機会が提供されているが、自由参加プログラムが多いため、よく参加する生徒としない生徒もいて、体験格差は生じている。生徒に動機づけしていきたい。	
	③	キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリアカジュアルデー募金を通して、里親スポンサーを啓蒙し、貧困にある子どもたちや地域を支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	多くの生徒が様々なボランティア活動に参加することが出来た。この2年間、毎年、延べ参加人数は、約200人ずつとなっている。卒業してもその精神は引き継がれている。カンボジア・ボランティア研修旅行にも10名が参加した。	A	4人の支援チャイルドを支えるために、毎月のサマリアカジュアルデーが目標献金額の18000円に届かない月も何回もあった。啓蒙の仕方を考える必要がある。	

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価							
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析
創造 教育 改革 部	①	スクールポリシーを具現化する「新教育課程」と「探究学習」の体系化	・新スクールポリシー（AP/CP/GP）に基づき、各コース（GSS/SS）における3年間カリキュラム・マップを策定する。 ・「探究（総合的な探究の時間）」について、中学から高校までの6年間を見通した系統的な指導計画（シラバス）を作成し、学年ごとの到達目標を明確にする。 ・選択科目や学校設定科目において、知識伝達型ではない「対話・協働」を中心とした授業設計（案）を作成する。	A: 次年度施行の教育課程表およびシラバスを完成させ、職員会議、執行部会等で承認を得る。 B: 「探究」の全体計画（ルーブリック評価等含む）の素案を作成する。 C: カリキュラム検討会議を定期的に開催し、教科間の調整を完了する。	新スクールポリシー（AP/CP/GP）に基づき、各コース（GSS/SS）の3年間カリキュラム・マップの策定に取り組み、作成を進めた（途中段階であり、今後も継続的にブラッシュアップしていく方針である）。また、「探究（総合的な探究の時間）」については、中学から高校までの6年間を見通した系統的な指導計画（シラバス）の作成に着手し、骨子（骨組み）を作成した。さらに、知識伝達型ではない「対話・協働」を中心とした授業設計（案）の作成は一部着手に留まっているが、授業改善を進める前提として、学習環境の整備を優先し、図書館への機の導入等、グループ活動が行いやすい環境づくりを進めた。	B	カリキュラム・マップは「完成」をゴールとするのではなく、運用しながら改善していく性質のものであり、本年度は策定作業を進めて骨格を整えた段階である。一方で、探究の6年間シラバスは骨子段階に留まっており、学年ごとの到達目標や評価（ルーブリック等）を含めた全体計画として、具体化を進める必要がある。また、「対話・協働」を中心とした授業設計（案）の作成は十分に進んでいないが、図書館等の学習環境をグループ活動が行いやすい形へ改変するなど、授業改善を実行可能にする土台整備を優先したことは次年度以降の推進に資する。今後は、整備した環境を活かしつつ、探究シラバスの具体化（到達目標・評価・指導の流れ）と、対話・協働型授業の設計（案）の作成を計画的に進め、教員間で共有できる形に整えることが課題である。
	②	探究と接続した「留学・国際プログラム（Wake-Up等）」の設計と準備	・従来の語学研修を見直し、探究学習（SDGsや異文化理解）の要素を取り入れた留学プログラム（Wake-Up等）の具体的な行程と内容を協議・決定する。 ・留学プログラムの実施時期、対象学年、費用、安全対策について関係分掌と調整を行い、実施要項としてまとめる。 ・留学に行かない生徒も含めた生徒のグローバル教育の機会保障についても検討し、学校全体の国際教育の方針を固める。	A: プログラムの詳細（行程・内容・費用）が確定し、次年度の募集（または実施）が可能な状態にある（校内承認完了）。 B: プログラムの骨子は固まったが、細部の調整（費用や募集時期の微調整など）が一部残っている。 C: 協議は行ったが、内容の決定には至らなかった。	従来の語学研修の内容を見直し、探究学習や異文化理解の要素を取り入れた留学プログラム（Wake-Up等）の設計を進めた。プログラムの行程や内容については大枠がほぼ確定しており、具体的な実施に向けた準備を進めている。また、実施時期や対象学年、費用、安全対策などについても関係分掌との調整を行い、基本的な枠組みは概ね整理することができた。さらに、留学に参加しない生徒も含めた国際教育の機会についても検討を進め、学校全体としての国際教育の方向性について大枠の方針を定めることができた。	B	Wake-Up等の留学プログラムについては、行程や内容などの骨子は概ね固まり、実施に向けた準備は進んでいる。一方で、費用や募集条件については入学者数の状況によって調整が必要な部分もあり、最終的な確定には至っていない。また、留学に参加しない生徒も含めた国際教育の方針については大枠の方向性を整理することができたが、具体的な教育内容や運用方法については今後さらに検討を進める必要がある。今後は、プログラムの詳細（募集条件や費用等）を最終確定するとともに、学校全体の国際教育の枠組みとして具体的な実施計画を整備していくことが課題である。
	③	図書館機能の統合と、探究・読書活動の拠点化（ラーニング・コモンス化）	・図書館業務（司書業務含む）を創造教育改革部の管轄下に置き、業務フローを整理・統合する。 ・「静かに本を読む場所」から「探究・対話・情報の拠点」へと機能を拡張するため、レイアウトの変更や、探究学習に関連する図書の選書・コーナー設置を行う。 ・授業や探究活動での図書館利用を促進するため、各教科担当へのアナウンスや利用ガイドダンスを実施する。	A: 図書館の利用人数または図書貸出冊数を前年比で維持・増加させる。 B: 探究活動や授業に関連した「特設コーナー」の設置や「選書」を年間1回以上行う。 C: 図書館業務の引継ぎ・マニュアル化を完了し、大きなトラブルなく運営する。	図書館を「静かに本を読む場所」から「探究・対話・情報の拠点」として活用することを目指し、図書館機能の整理と活用の促進を進めた。特に図書委員の活動が活発に行われ、生徒が主体的に図書館運営や読書活動の推進に関わるようになったことにより、図書館の貸出冊数および利用人数は前年と比べて大きく増加した。また、探究活動や授業に関連する図書の選書や特設コーナーの設置についても一部実施し、探究活動との接続を意識した図書館活用を進めた。	A	図書館の貸出冊数および利用人数は前年より大きく増加しており、図書委員の主体的な活動が図書館利用の活性化につながったと考えられる。この点は、図書館を探究・読書活動の拠点として活用するという目標に対して大きな成果である。一方で、探究活動や授業と連動した特設コーナーや選書については一部実施に留まっており、今後さらに体系的に整備していく必要がある。また、図書館業務のマニュアル化や引き継ぎについては、担当者の変更がなかったため具体的な整備には至っていない。今後は図書館運営の仕組みを整理し、担当者変更時にも円滑に引き継ぎが行える体制を整えることが課題である。

*達成度は3段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
入 試 広 報 部	①	オープンスクール・入試説明会の満足度向上と生徒参画の推進	・オープンスクールや説明会において、受付や誘導、一部の学校紹介パートなどで生徒スタッフ（ボランティア等）を起用し、参加者との接点を設ける。 ・参加者アンケートに基づき、不満点や分かりにくいと指摘されたプログラムの改善を行う。 ・スクールポリシー（AP）を意識した説明内容を一部盛り込み、本校が求める生徒像（自分の価値を知りたい人、学び方を知りたい人等）を受験生・保護者に伝える。	A: 参加者アンケートの満足度で「満足」以上の回答を90%以上維持する。 B: 前年度と比較して、生徒が運営に関わる時間または人数を増加させる。 C: 全てのイベントを計画通りに実施し、大きなトラブルなく運営する。	オープンスクールおよび入試説明会の運営では、生徒スタッフを受付や誘導などの役割に配置し、生徒が主体的に運営に関わる体制を整えた。また、参加者アンケートの結果を踏まえながら運営方法や説明内容の改善を図り、参加者が本校の教育内容を理解しやすい構成を意識して実施した。その結果、イベント参加者アンケートでは「満足以上」の評価が80～90%程度となり、概ね高い満足度を得ることができた。	A	参加者アンケートでは「満足以上」の評価が80～90%程度となり、高い満足度を維持することができた。また、生徒スタッフの参画人数や関わる時間は前年より増加しており、生徒参画の推進という観点でも成果が見られた。イベント運営において大きなトラブルは発生しておらず、安定した運営を行うことができた。今後はアンケート結果の分析をより丁寧に行い、満足度向上につながる具体的改善を継続していく必要がある。	
	②	スクールポリシーに準拠した広報ツールの刷新と定期的発信	・募集要項および学校案内パンフレットにおいて、新しいスクールポリシー（Mission, Vision, AP）の文言や概念を反映させたデザイン・構成に刷新する。 ・SNSやHPを活用し、日々の学校生活や行事の様子を定期的に更新する（アクションプランにある「ICT活用の発信」を含む）。 ・資料請求者やイベント参加者に対し、適切なタイミングでDMやメール配信を行い、関心を継続させる。	A: 新しいスクールポリシーを反映したパンフレット・募集要項を納期通りに完成させる。 B: SNSおよびHPの更新頻度を維持・向上させる。 C: 資料請求数およびイベント申込数を前年並み、または微増（前年比105%程度）させる。	学校案内パンフレットおよび募集要項については、スクールポリシー（Mission・Vision・AP）を反映させた内容で作成を進め、次年度分についても納期通り完成する予定である。また、SNSやホームページを活用して学校生活や行事の様子を継続的に発信し、広報活動の強化を図った。資料請求数の正確な前年比は把握できていないものの、問い合わせ件数は体感として20～30%程度増加しており、本校への関心を高める広報活動につながっていると考えられる。	A	パンフレットおよび募集要項についてはスクールポリシーを反映した形で作成を進めており、納期通りの完成を見込んでいる。また、SNS等を通じて学校生活を継続的に発信したことで、資料請求や問い合わせの増加につながったと考えられる。問い合わせ件数は体感として20～30%程度増加しており、広報活動による認知度向上が一定程度成果として表れている。今後は資料請求数やイベント申込数などの数値をより正確に把握し、広報活動の効果を定量的に分析していくことが課題である。	重 村 雄 太
	③	中学校・学習塾への丁寧な訪問活動と新方針の丁寧な説明	・主要な中学校および学習塾への訪問を計画的に行い、新しいアドミッション・ポリシーや、求める生徒像（悩んでいる生徒、学び方を知りたい生徒への支援体制など）について説明する。 ・入試説明会等の案内を確実にを行い、中学校・塾の先生方からの信頼関係を維持する。 ・昨年度の入試結果や進学実績に関するデータを整理し、対外的に分かりやすく提示できる資料を作成する。	A: 重点訪問対象としている中学校・塾への訪問を100%実施する。 B: 中学校・塾向けの入試説明会への参加者数を前年比で維持する。 C: 外部関係者からの問い合わせに対し、迅速かつ正確に対応する体制を維持する。	中学校訪問は年間3回程度実施し、ほぼすべての対象校を訪問することができた。また、学習塾訪問についても年間2回程度実施し、塾関係者に対して本校の教育方針や入試情報の説明を行った。さらに、入試説明会の案内や進学実績の共有などを通して、中学校および学習塾との関係構築を図った。入試結果や進学実績についても対外資料を作成し、関係者への情報提供を行った。	A	中学校訪問は年間3回実施し、対象校のほぼ100%を訪問することができた。また、学習塾訪問も計画的に実施し、入試説明会の参加者数は前年比で概ね維持することができた。塾関係者の参加者はやや増加している印象があり、中学校関係者からの参加も多く見られた。さらに、入試結果や進学実績の対外資料を作成し、訪問時や説明会で活用することができた。今後は訪問活動の成果をより可視化し、志願者増加との関連を分析していく必要がある	